

民の眉に迫つてゐた。この恰も戦争の前夜にあるが如き緊張した国際情勢に當面して、國防事業の主体をなす我國製鐵産業の大動脈である製鐵所に總罷業を惹起することは日本の國防の上に重大缺陷を招來し、祖國日本を救国す可からざる軍事上、作戦上の不利に陥れることは明白であつた。製鐵所全従業員は自己の生活問題に直接重大な影響を保持つ製鐵官民合同反對の運動を従業員として處理しなければならぬ火急焦眉の立場にあると同時に又國民としての立場から、松岡全權、壽府に國際聯盟脱退を絶叫し、國際情勢物極く緊張して、全國民の不安と焦慮の只だ中に製鐵官民合同反對を總罷業で戦ふか否かを考へねばならなかつた。製鐵所全従業員の冷靜にして聰明なる判断は遂に正しかつた。従業員的生活問題の解決確保の利己的立場から國防上に一大支障を與へるが如き總罷業こそ非國民的賣國的行爲なりと断定する愛國的結論へ到達した。

然しそれは従業員の内心的決意であつて外面的には敢然として第六十四議會に於て審議中の製鐵合同法案を飽くまで戦わねばならなかつた。製鐵官民合同反對同盟は猛然と總罷業の決行を決議した。即ち労働階級がその生活上の問題を解決するために結成した行動的集團組織は労働階級の護身用の劍とも言つても良いものである。總罷業はその劍を抜いて敵を斬るに餘るべきものである。争闘する以上「私の刀は断じて抜きませぬ」と言ふことを表明することは戦わずして白旗を掲げるに等しく敵の蹂躪に任せられるのである。何時抜くかわからない刀で敵を威嚇し、恐怖させ、しかも劍を用ひずして敵を威壓降服せしめるのが戦ひの最上である反對同盟はこの戦術を採つたのである。刀を持つたから、抜き放つて是非でも斬らねばならぬと言ふのは兇賊に類する共産主義的破壊運動である。

△労働階級の歴史的大膽を記録した反對運動の不敵の戦功